

# 戦後派の終焉

—堀田善衛さんと私

古山 登

堀田善衛さんが亡くなった（一九九八・九・五）。訃報に接した瞬間、「嗚呼、戦後派も遂に完全に終わったか」という感慨が沸々と湧いてきた。

戦後派とは「第一次戦後派」と称された一種の文学的エコールで、梅崎春生（一九一五～一九六五）、椎名麟三（一九一〇～一九七三）、武田泰淳（一九二〇～一九七六）、野間宏（一九一五～一九九二）、埴谷雄高（一九一〇～一九九七）の諸氏と堀田さん（一九一八生れ）達、明治末年から大正初期にかけて生れ、戦前何らかの形でマルクス主義に係り、敵しい思想統制と弾圧に屈することなくひっそりと信念を守りつづけた作家群を指していた。

私の少年時代は、学齢に達した昭和七年には既にその前年の上海事変・満洲事変に象徴される、やや生硬な云い方になるが、日本の軍国化・ファシショ化は大きく第一歩を踏み出して居り、その後も日中戦争、太平洋戦争と戦域の拡大につれてその度合いは強まる一方、戦争に疑問を抱いたり体制を批判する声や鬱悶気は学校にも一般社会にも全くなかった。

一方、中学生になって文学書を読み漁るようになった私は『現代日本文学全集』（改造社版）の『プロレタリア文学集』で日本にも僅か十数年程前に真向から天皇制やファシズムと対決した人々が居たことを知った。そしてそういう人たちが、結果的にはうまく日本

“帝国”圏外に脱出できた人々を除いては獄舎にほうりこまれて呻吟するか、“転向”して沈黙を強いられるか、或いはファシストに変身してしまうか、何れにしても辛い屈辱的な日々を送っていたことも同時に知った。

私自身も、年を追う毎に“聖戦”に疑惑を持ち、皇国史観にマヤカシを感じ、天皇制に批判的になり、学校教練をサボルようになって行ったが、現状と心中の蟠りの矛盾を口にした書いたりすることには臆病だった。学校だけでなく警察の加わった処罰が恐く、勇気がなかったのである。

戦争が終って取締法規が撤廃され、思想・言論・表現・出版の自由が認められて、戦時

中沈黙を強いられていた言論界・文学界・出版業界が俄に生氣を取り戻し、一斉に活動し始めた中で、学生であった私が「桜島」「日の果て」「ルネタの市民兵」(梅崎春生)「重き流れのなかに」「深尾正治の手記」「永遠なる序章」(椎名麟三)「蝮のすゑ」「愛のかたち」「異形の者」(武田泰淳)「暗い絵」「顔の中の赤い月」「崩解感覚」(野間宏)「死霊」(埴谷雄高)などを眩しい思いで読んだのも、中学時代の鬱屈した思いが下地になっていたのかも知れない。

だから、昭和二十五年、改造社に入社し、『改造』編集部で創作欄を担当することになった私は早速この人達を訪ねて原稿を依頼したのだが、堀田さんだけは私の執筆依頼リストから洩れていた。というのは、敗戦後も堀田さんは上海で昭和二十一年末まで中国国民党に留用されたため帰国が遅れた上に、当時の堀田さんは作家としてでなく詩人として評価されていると思っていたからである。しかし堀田さんとは程なく知り合うことになった。新宿の通称「ハモニカ横町」に在った屋台「ナルシス」という酒場に私はよく飲みに行っていたが、そこは草野心平(一九〇三—一九八八)さんをはじめ詩誌『歷程』同

人の溜り場のようになって居り、その店でたまたま来合わせていた堀田さんを草野さんから紹介された。また、同じ新宿の紀伊國屋書店の茶房で毎月催されていた「三田文学会」の例会「紅茶の会」でも親しく言葉を交わすようになり、会の後「ナルシス」に連れ立って飲みに行くこともあった。また、堀田さんはこの年「祖国喪失」「彷徨える猶太人」という作品を『群像』『人間』というそれぞれに権威のある新興の二つの文芸雑誌に発表し(昭25・五月号)、埴谷さんの云う「遅れて来た戦後派」として既に注目されていたが、全く気分ったところがなく、茫洋という表現がびったりの挙措・口調には魅力があった。話の内容も的確で含蓄があった。

しかし、堀田善衛の名を決定的にしたのは『広場の孤独』であった。この作品は、『人間』昭和二十六年八月号に前半が発表され、次いで『中央公論文芸特集』二十六年秋季号に既発表の前半も含めて全篇が一挙掲載されて文壇・出版界の話題になった。『文芸特集』というのは、『中央公論』の別冊増刊季刊文芸誌で、この号は多分本誌の九月号と十月号の中間に発売されたように覚えていたが、一度他誌に掲載された作品を再録するということは雑誌編集の常識に反した行為として話題になったのである。作品内容は、米ソが敵しく対立していた冷戦時代の真只中に起った朝鮮戦争を背景に、一人のジャーナリストを通じて「日本の知的現実の一横断面を描いたもの」(平野謙)であったが、国際的には資本主義対共産主義、国内では旧連合国との講和を巡って単独か全面かの選択を迫られていた知識人の間で大評判になった。そう云えば、あの頃は「知識人」という階層が敵として実在し、知識人は知識や娯楽だけでなく教養や思想を主として雑誌書籍から得ていた。

そして「広場の孤独」の評判が高まるにつれて、『中央公論』の非常識<sup>①</sup>は快挙に変わり、単行本として発行(昭26・11・中央公論社)されるや忽ちベストセラーになると共に芥川賞の絶対本命と目されることになった。

私が、堀田さんを柱に『改造』で「新進作家特集」を組もうと思立ったのもこの作品を読んだ直後だった。しかし思いは同じライバル誌『中央公論』本誌でも堀田さんの起用を決定していて、私より一足早く堀田さんに昭和二十七年二月号に寄稿を依頼していた。

『改造』と『中央公論』は発売日が同日で、従って原稿締切もほぼ同じ、また、総合雑誌の場合新人作家の登用は二月号という慣例になつていたので完全に揃合つたわけである。当然のことながら堀田さんは私の依頼を断わつた。しかし断わられた理由がライバル誌にあるとあつては私も引き退るわけにはいかない。私は粘りに粘つて何とか承諾まで漕ぎつけた。

しかし無理はやはり無理で締切りが迫つてやはり書けないと堀田さんから断わりの連絡があつた。私は取るものも取りあえず逗子の堀田邸へ、そしてどれ位の時間「書けない」「何とか」の押問答を繰り返したろうか、堀田さんは一端書斎に引込んだ後一束の原稿を持って現れ「これ、随想なんだが、読んでみてくれないか」と言つた。内容は、戦時下の上海の、武田泰淳さんや堀田さんの鬱屈した青春像を描いた随想としては長めの文章であつた。私は読み終るなり言つた。「行けますよ。手を入れて小説仕立てにすれば好い短篇になりますよ」。堀田さんは暫く考えていたが「やれるだけやってみよう」と答えてくれた。これが「断層」である。

「断層」は三十枚許りの短い小説だったが、

たった一日で書き上げ最終締切りに辛うじて間に合つた。じつくり腰を落ち着けて、一字一句を丁寧に選んで書く堀田さんとしては離れ業と云つてよいだろう。

明けて昭和二十七年正月明け『改造』も『中央公論』もそれぞれ二月号が初荷として書店に並べられた。両誌を較べると、『改造』の創作欄が二本の連載小説（火野葦平「盲目の厩」、村上元三「ふらん亭物語」）と堀田善衛「断層」辻亮一（漂泊）島尾敏雄（旅は妻子を連れて）の若手三人、前月号から零れた武者小路実篤（罪の子）で在り来りの構成だつたのに対して、『中央公論』は「精銳競作集」と題して武田泰淳（美貌の信徒）井上靖（北の駅路）田宮虎彦（異端の子）堀田善衛（潜函）をずらりと並べた見事なものだつた。私ははつきり敗けたと思つた。

しかし、堀田さんに関しては、潜函工法というビル建築では革命的とも云える新工法とそれに挑戦する建築技師を描いた「潜函」は斬新なテーマで確かに野心作ではあつたが、主題が工法と技師にやや分極しているように感じられたのに対し、「断層」は、舞台が堀田さん自身が書いている「私の、特に戦後の

生き方そのものに決定的なものをもたらししてしまつた」「一九四五年三月二十四日から一九四六年十二月二十八日まで、一年九ヶ月ほどの上海生活」（『上海にて』昭34・7、筑摩書房刊、「序文」より）であり、作中人物も、原形が御本人、武田泰淳氏など熟知の人物であつたから、全体がよく熟れており人物も実在感が生き生きと描かれていて、作品としては「断層」の方がよく出来てるなど私が傍かに思つたのは担当者の欲目だつたらうか。

そして、この二誌が発売された数日後に下馬評どおり「広場の孤独」が「漢奸」（『文學界』昭26・九月号）と共に第26回芥川賞受賞が決定した。「改造」「中央公論」と云えば、戦前の権威は大きく下落してしまつていたがそれでもまだ「文壇の登龍門」としての一角に在つたし、「芥川賞」は今ほどにマスコミや世間が騒ぎ立てることも贈賞社がパーティを設営して文壇人・出版社・文化芸部記者を招いて受賞者を賑々しく顕彰するということもなかつたが「芥川賞」は誰もが認める文壇・ジャーナリズムへの最も権威ある「登龍門」であつたから、堀田さんはほぼ完璧な形で「登龍門」を駆け抜けてしまつたことになる。

しかし、その後も、堀田さんは決して所謂“流行作家”にならなかつた。着実に撓まず（煩雑になるので初出誌記載は省略するが）『歴史』（昭28、新潮社）『時間』（昭30、新潮社）『記念碑』（第1部 昭30、第2部 昭31、中央公論社）『鬼無鬼島』（昭32、新潮社）堀田文学の一つの頂点を示したとされる『海鳴りの底から』（昭36、朝日新聞社）等の意欲的話題作を刊行、その後も書き下し長編『橋上幻想』（昭45、新潮社）『方丈記私記』（昭46、筑摩書房）等を発表して問題意識の健在を示してくれた。

『改造』にもその後「碎かれた顔」（昭和28、八月号）「山川草木」（昭29、七月号）「玄浄遺言」（昭30、一月号）と『改造』終刊（昭30、二月号）まで一年に一作は力作を頂戴し、どの作品も新聞の文芸時評などに採り上げられ担当者として面目を施した。普通小説を依頼・頂戴するのは大体一年半から二年に一作というのがほぼローテーションになっていたから、堀田さんの一年に一作というのは有難かつた。

また『改造』が廃刊され改造社が倒産して堀田さんと私の作家と編集者という関係が実質的に無くなった後も、堀田さんが（夫人

共々）私に示してくれる態度は変わらず、後に就職した集英社でも、私が直接担当でもない『新日本文学全集』（全38巻、昭37、2と40・5）や『集英社文庫』の難渋していた収録作品の版權交渉では直接出版社に掛け合つてくれる等大いに協力していただいたものである。

堀田さんに最後に御目に掛かつたのは今から四年程前の平成六年十月、堀田さんの二回目の全集（全16巻、平5・5と6・8、筑摩書房）の完結記念パーティーの会場であった。会の主旨は「長年堀田善衛の作家活動に協力してくれた人たちに感謝の意を表したい」ということで、出席者も、多くはもう現役を引退した元編集者・堀田担当であった。

参会者同士も互いに旧知の者が多く、会場は堀田夫妻を中心に終始近親者の集まりのような雰囲気包まれていた。堀田さんと私たち間にある独特な信頼感が醸し出す雰囲気であった。

作家と編集者とは相互に信頼感で結ばれていなければ好い仕事は出来ない、とはよく言われることだが、実際には、若い編集者を自分のように思っている流行作家やまるで自分がプロデューサーであるかのように思い上つ

て「書かしてやるんだ」という態度であれこれ注文をつけるヴェテラン編集者の言葉をそのまま受け入れる売文業者も少なくないだけに、自己にはあくまで誠実でありながら、担当編集者に対しては会社でのポストや年齢に関りなく常にあくまで対等のパートナーとして遇してくれた堀田さん（夫妻）の対応はいやでも信頼感を増強させたものだった。

しかし、その堀田さんも、もう居ない。「戦後派」という呼称も今では文学史の中に埋没してしまっている。また「戦後派作家」の一人一人皆「戦後派」で括るには大きな名前になつてゐる。が、私にとって「戦後文学」は青春の文学であり、堀田さんは私の三十年間に及ぶ編集者生活の中で最も信頼し共感することの多かつた作家の一人であった。嘗て埴谷さんが二十年（昭21・1と平7・11）の歳月をかけて「死霊」（全9章）を完成した時に「これでやっと『戦後文学』も終わったな」と思ったものだったが、今回堀田さんを喪つて「堀田善衛 別れの会」（一九八八・十・十四）に出席し、四年前の「全集完結記念パーティー」と変らぬ参会者の顔触れを眺めながら、改めて「嗚呼、戦後派も遂に完全に終つたか」という感懐に耽つたことだった。